

龍門北魏窟における『宝珠』の表現と展開

— 非珠(圭状)の「宝珠」を中心として —

仲 嶺 真 信*

I

龍門石窟の破損の原因については、自然崩壊と人為的破壊の二つが考えられる。その中でも、とりわけ目障りかつ嘆息を禁じえないのが、諸洞の随所に生々しく残された人為的破壊の膨大な爪痕である。その結果、無惨にも空洞化し荒廃同然の諸仏龕や仏洞が、その醜態をさらしている。

このように、不幸にも破損を受けたものの中には、完全に壊滅した諸断片や、一方、破壊に伴い海外流出した後、アメリカ、フランス、日本などの諸外国の博物館あるいは個人の所蔵となり、幸いにも消失を免れた諸断片が現存する。今日では、この破損以前の龍門石窟の原状を確認する方法は、旧様を伝える稀少の写真集や拓本類以外に見出し難い。

破損を受けた諸断片で現存するものは、近い将来、実物断片を原所在地へ返還し、修理・復元に供することになれば幸いである。その返還交渉は、多難を極めるにちがいないが、その実現へ向けての運動を起こす時期にきていると筆者は思う^①。したがって、今後の龍門石窟の調査研究の方法は、旧様を伝える写真・拓本等と石窟諸洞の現状とを比較照合しながら、現存する諸断片を復元する作業、および従来の研究の諸成果に再検討を加えていくことなどあげられる。あるいは、従来の研究方法にも増して、さらに重要性をもっているのが、遺蹟に残された諸作品を根気強く、精密に観察・記録・拓取する方法であろう。今日の龍門石窟の現状を観察すると、諸洞の壁面に破損は認められるものの、諸仏龕を中心とする装飾浮彫が、おびただしく残存している。この装飾浮彫は、はなはだしく破損した高肉彫の諸彫刻に比べると、きわめて保存状態がよく、龍門様式を具体的に再検討していく過程の上で、冷静に判断するならば、むしろ高肉彫の彫像以上に重視しなければならない存在価値をもっている。従来は、この装飾浮彫に関する研究^②が、きわめて立ち遅れていたと考えられるが、今後の新しい開拓分野であろうことは、まだまだ拓取を実施していない壁面が、おびただしく残存していることから首肯されよう。装飾浮彫の壁面は、拓取

*別府大学アジア歴史文化研究所美術史部門

することによって、絵画的画面として記録・保存することが可能である。特に、写真などでは記録しえない目の届かぬ場所や細部については、この手法は、最大の威力をもつ。できうる限りの全壁面にわたり、拓取を実施するならば、今後の龍門石窟の研究成果は、飛躍的に発展することが必定であろう。

小論の対象となる北魏代諸洞における高肉彫彫像のほとんどは、特にその顔面を欠失していて残念だが、諸仏龕を中心とする装飾浮彫の残存部分を中心として、龍門様式の分析作業や再検討は可能である。事実、この装飾浮彫という絵画的壁面に関する図像学的研究において、従来とは異なる新たな様式観が吉村怜氏によって提唱されている^③。

ところで、龍門北魏窟において、「宝珠」は、その初期からすでに、珠状のいわゆる「宝珠」と非珠(圭状)の「宝珠」の二種が共存して検出される。小論は、特にこの後者の「宝珠」に焦点をあてていくことになるが、この形態の表現は、雲崗石窟におけるそれと一部類似性は認められるものの、系統的には全く別のものと考えられる。小論は、雲崗石窟の諸例との比較を若干加えながら、龍門独自の様式とでもよぶべき非珠の「宝珠」をめぐって、その表現と展開について、現存する壁面や彫像及び旧様を伝える写真・拓本などの資料を駆使して、管見の及ぶ限り言及しようと試みたものである。

II

先述のように、龍門北魏窟において展開している「宝珠」の表現は、大きく二種に分類される。すなわち、一つは、いわゆる「宝珠」と称するもので〈珠状〉の形態。これは、主に、光背及び仏龕面、あるいは、菩薩・供養者などの持物の一つとして表現される。これに対しもう一つは、筆者がかつて〈角状〉と名づけた「宝珠」^④で、〈非珠〉あるいは〈圭状〉の形態。これは、珠状の「宝珠」同様、主に光背及び仏龕面、あるいは、菩薩・供養者などの頭部における「摩尼宝冠」^⑤と呼ぶべき宝冠装飾の一部として表現される。

以下に考察の都合上、まず二種類の「宝珠」の所在を任意に列記し整理しておこう。

1 珠状の宝珠

- | | | |
|------------|---|--|
| 1) 光背(仏龕)面 | { | ①古陽洞左(北)壁第三層第一龕
②賓陽中洞 { ④奥壁本尊光背
⑤左右(北・南)壁本尊光背
③蓮華洞右(南)壁第一層 { ④中部釈迦仏龕
⑤西部釈迦多宝並坐仏龕 |
|------------|---|--|

- 2) 菩薩及び供養者の持物 { ①蓮華洞左(北)壁脇菩薩
②古陽洞左(北)壁第三層第一龕 (1)の①と重複)

2 非珠の宝珠

- 1) 光背(仏龕)面 { ④左(北)壁第二層奥龕(古陽洞銘直下)
①古陽洞 { ⑤左(北)壁第三層第一龕
③右(南)壁第二層奥龕^⑥
②賓陽中洞 { ④左(北)壁本尊光背
⑤右(南)壁本尊光背
③その他 惠簡洞と蓮華洞との間の一龕^⑦

- 2) 宝冠裝飾 { ①賓陽中洞 { ③左右(北・南)壁本尊兩脇菩薩頭部^⑧
⑤前(東)壁供養者頭部(皇后礼仏進香図)^⑨
②蓮華洞右(南)脇菩薩頭部^⑩
③普泰(第14)洞奥(西)壁本尊兩脇菩薩頭部^⑪
④魏字洞右(南)壁本尊(弥勒菩薩)頭部^⑫

以上が、龍門北魏窟において任意に検出される二種の「宝珠」の諸例である。これらの宝珠は、今後その数を増すものと思われるが、種類は上記の二種にとどまるものと推測される。

さて、ここでは二種の中から、〈非珠〉だけに限って、配置上の問題について、以下に北魏時代における雲崗石窟^⑬と龍門石窟との諸例の比較を通して若干言及しておこう。

まず、

- 1) 雲崗において見られ、龍門において見られない例。

宝珠を菩薩・天人などが掌中に奉持する例^⑭、及び天井壁面に配置する例。

- 2) 雲崗において見られず、龍門において見られる例。

宝珠を「摩尼宝冠」と呼ぶべき宝冠裝飾の一部として配置する例。

1)・2)のように、配置方法における相違点の一部認められるが、雲崗と龍門の両者に共通する特徴としては、仏龕及び光背面に「宝珠」が検出されることである。特に、拳身光内の火焰帯と円圈帯との間にできた先細りの小空間(後述の象徴的空間)に、供養者(天人・菩薩を含む)及び化仏群と「宝珠」、あるいは、焰を発する開敷蓮華などが並存する^⑮点から、両石

窟間には、部分的ではあるが、一種の類似性を認めることができる。しかし、両者に連続性を認めることは、きわめて難しく、特に、非珠の「宝珠」を宝冠装飾の一部として配置する方法(摩尼宝冠)は、龍門において新たに台頭してきた北魏龍門様式の一要素とでも呼ぶべきものでもあり、雲崗においては一例すらも確認されなかった。

このような雲崗とは全く異なる要素の発生と展開については、IIIに述べる龍門北魏窟における非珠の「宝珠」の表現及び構成要素を細見していく過程で明らかにしようと思う。

III

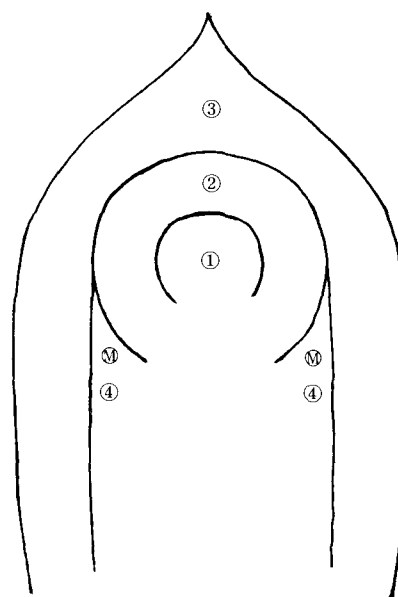
さて、先程は、雲崗と類似性のある仏龕(光背)面に表現された非珠の「宝珠」及び雲崗とは連続性の認め難い宝冠装飾中の非珠の「宝珠」についてふれたが、本章においては、北魏窟を最も代表する古陽洞と賓陽中洞とを中心として、それらの「宝珠」の表現や配置などの問題について考察を進めていく。なお、関連する北魏諸洞の例についても若干言及するつもりである。

では、さっそく、次に「宝珠」の具体的作例について、仏龕の簡単な説明をしながら紹介しよう。

1 古陽洞左(北)壁第二層奥龕(古陽洞銘直下、図版1)

高肉彫の交脚菩薩像(頭部をすべて欠失)を主尊とし、その両脇に菩薩立像二軀(二像共頭部を一部欠失)を配し、さらに主尊前方の両脇に一对の獅子(頭部を欠失)を置く。また、主尊拳身光と両脇菩薩像との間には、浮彫の羅漢形立像が二軀ずつ(現存)表現されている。¹⁰⁾

ところで、非珠の「宝珠」は、挿図1のように、主尊光背面に二例(挿図1㉓、図版2)、楣拱額区画内に二例(図版3㉑㉒)検出される。前者二例は、拳身光の火焰帯(挿図1③)と円圈帯(挿図1②)との間にできた先細りの狭い空間(挿図1㉓㉔)に認められる。この位置は、ちょうど、交脚像両肩の左右にあたり、頭光円圈帯化仏群(挿図1②)とその下方の光背内区化仏群(挿図1④)とに挟まれた、きわめて象徴的



挿図1 古陽洞左(北)壁第二層奥龕
①蓮華 ②化仏円圈帯
③水焰帯 ④化仏縦帯 ㉓宝珠

な空間(挿図1㉓)である。(以下、小論においては、この位置を象徴的空間と呼ぶことにする。)また、後述する光背の例においても、この位置には、珠状・非珠を問わず、共通して「宝珠」が蔵存する神聖な空間でもあるので、特に注意を払わなければならない。なお、拳身光頂上左右の虚空には、掌中に香爐と宝華を奉持する天人が二軀認められる。

先述の「宝珠」の形態は、パルメット未着の蓮台に乗り、不均整形の(ゆらゆらうごめく五条ほどの細長い)焰の中に包蔵されているが、その長五角形状の本体内部には、Y字形の線状が認められる(図版2. 仮称A型)。このA型は、龍門においては稀有な存在であり、後述の均整形(蓮弁状)の焰に包蔵される「宝珠」(挿図3. 仮称B型)とは、焰の表現方法が、きわめて対照的である。そして、宝珠本体の形状を除いて、付着の焰の表現だけを細見すると、まさに、雲崗において光背中に検出された「宝珠」の焰の表現ときわめて酷似していることが分る。しかし、雲崗(長六角形状)と龍門(長五角形状)とでは、非珠の「宝珠」本体の形状が若干異なり、しかも「宝珠」を乗せる「台」の表現が、主として「基台」もしくは「承盤状」(雲崗)とパルメット付着の「蓮台」(龍門)というように、全く異なる形状で構成されている。この点に関しては、雲崗と龍門との間に完全な連続性は、きわめて認め難い。

後者の楣拱額中央部区画内の化仏間に検出された「宝珠」の形態は、B型(後述)に属するものと考えられる。つまり、パルメット付着の蓮台に乗る均整形の焰(蓮弁状)の中に、「角状」(本体が長六角形状とも長五角形状とも判別がつきにくい、何れにせよ非珠)の「宝珠」が包蔵されている。しかも、この宝珠は、蓮台下方に茎が認められ、明らかに地中から涌出していることが分る(図版3㉔㉕)。

ここでは、この宝珠の表現に注目して、特に、楣拱額各区画内における諸図像との関係から考えてみると、実に重要な意義が秘められていると推測される。つまり、坐仏・坐仏・宝珠・立像・坐仏・立像・坐仏・立像・坐仏・立像・宝珠・坐仏・坐仏と並ぶ区画内の統一された配置方法が認められるが、立像の左右が常に坐仏である法則性から推測すると、両端の立像の右脇、あるいは、左脇に位置する「宝珠」の意義は、きわめて重大である。おそらく、この「宝珠」は、「坐仏」もしくは、「立像」(菩薩形)^⑬と同等の存在意義をもつものと解釈される。このようなことは、先述の光背内の象徴的空間と呼ぶべき位置に表現されていた「宝珠」についても指摘することができよう。つまり、化仏群の間に配置されていた「宝珠」も、それらの化仏群と同等の存在意義を認めてもよいことになる。換言すると、すなわち、楣拱額内あるいは、光背内の何れの「宝珠」とも、時に忽然と「坐仏」・「菩薩」に化現し、また、時に忽然と「坐仏」・「菩薩」は、「宝珠」に化現するというような神変を示す表現であろうと考えられる。「仏」即「宝珠」, 「宝珠」即「仏」というような仏教的理念が意図されていると解釈することができるのではないだろうか。^⑭

ところで、光背中の「宝珠」と「化仏」との関連を説明するために、とりわけ参考にな

る例として次のものがあげられる。例えば、雲崗第9洞にみられる「宝珠」(非珠)の場合(挿図2)、図のように、中心の大宝珠を圍繞する小宝珠が七体表現されている。この宝珠の配置を、光背とその本尊との関連にちなんで説明すると、例えば、化仏と主尊の位置に、それぞれ、「化仏」を「小宝珠」、「主尊」を「大宝珠」という置換をおこなうとすれば、これは、ちょうど、七化仏のみられる場合の光背の例にすべて符合させることができよう。化仏は、主尊の分身、もしくは化現であるとする、挿図2の例において、大小の宝珠は、それぞれ本身と分身の関係を現出しているとみることができる。



挿図2 雲崗第9洞「宝珠」

以上のことがらは、光背中に表現された化仏と宝珠との関連にも適用されよう。つまり、本尊の周囲にみられる化仏と宝珠は、その本尊の化身・分身であるとするなら、ここでは、その化身・分身である化仏と宝珠とが、根本的には、同一の意義をもつものとして配されていると解されよう。ここに、先述の「仏」即「宝珠」という意味がよみとれる。

2 古陽洞左(北)壁第三層第一龕(図版4)

高肉彫の坐仏(定印、通肩、頭部をすべて欠失)を主尊とし、その両脇に菩薩立像二軀(右脇菩薩頭部欠失、左脇菩薩頭部残存)を配し、さらに主尊前方の両脇に一對の獅子(現存)を置く。挙身光と両脇菩薩立像との間には、羅漢形立像を各一軀ずつ(現存)線刻^①。

さて、左右の両脇菩薩立像頭光上辺の虚空中に、雲を伴う天人像(宝器、宝華などを奉持)と共に、パルメット付着の蓮台に乗る非珠の「宝珠」が二例検出される(挿図3、4、図版5)。この宝珠本体は、長五角形状を示し、縦位置で均整形(蓮弁状)の焰の中に包蔵されている(仮称B型)。しかも、本体そのものの中央部には、Y字形の線状が認められる^②。一方、左脇菩薩立像頭光横の虚空中には、パルメット付着の蓮台に乗る均整形の焰に包蔵された珠状の「宝珠」が検出される(図版5)。これは、いわゆる「宝珠形」と呼ばれている形態であり、龍門北魏窟においてすでにその初期から、非珠の「宝珠」と共存して出現することが確認される。しかも、後世(隋以降)、「宝珠」といえば、この形態を指すほど圧倒的に流行し展開する。いわゆる「宝珠」の最も典型的例である。

さらに、この珠状の「宝珠」のすぐ下方に、羅漢形の人物がみられるが、その両手には、

均整形の焰に包蔵され、蓮台に乗る珠状の「宝珠」が奉持されている²³。一方、光背(挿図4)は、中心に蓮華(挿図4①)、その外側の円圏帯に化仏群(挿図4②③)を配し、さらに外区に火焰帯(挿図4④)をめぐるせる挙身光となっている。象徴的空間に、化仏が数体縦列に続くが、その左右の最上端の同位置(挿図4㉓)に、蓮台に乗る珠状の「宝珠」が確認される。宝珠の上端には、一条ほどの細長い焰をくねらせているが、その基本は、均整形の焰であり、その一変化の表現と考えられる。この「宝珠」についても、先述のように、化仏と同等の存在意義を認めることができる。

なお、尖拱額中央には、二仏並坐の小龕²⁴、その両脇には、菩薩列像と、維摩と文殊²⁵とが配置されている。

3 古陽洞右(南)壁第二層奥龕(図版6)

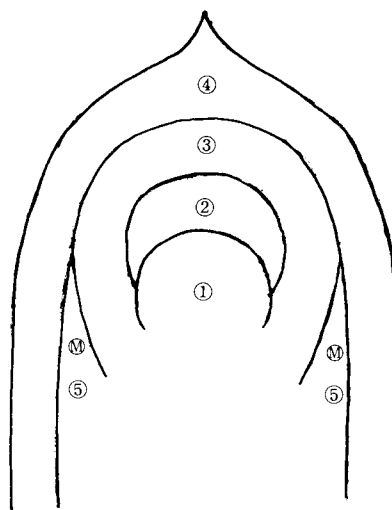
配置上、この仏龕は、先述の左壁古陽洞銘直下の仏龕(主尊交脚菩薩)と対面しているだけでなく、意味の上からも、弥勒と釈迦という信仰上の密接な関連を認めることができる。高肉彫の中尊(与願・施無畏・通肩、頭部をすべて欠失)は、一段と高い裳懸座上に結跏趺坐。その両脇に菩薩立像二軀(二像共頭部をすべて欠失)を配し、さらに裳懸座前方の両脇に一对の獅子(一对共頭部をすべて欠失)を置く。挙身光と両脇菩薩立像との間には、一軀ずつの羅漢形立像(それぞれ蓮茎と鉢を奉持、現存)が、浮彫で施されている。

中尊の挙身光外区は火焰帯(挿図5③)、その内区の頭光は、中心が蓮華文(挿図5①)で、その周りに化仏群が円圏(挿図5②)をなす。象徴的空間には、パルメット付着の蓮台に乗る非珠の「宝珠」(挿図5㉓)が検出される。この形態は、今までみてきた例(A型、B型)とは若干異なり、焰の表現が全くみられず、やや単純な形となっている(仮称C型)。宝珠本体の中央には、Y字形の線状が、かろうじて確認される。一方、蓮台に付着するパルメットの表現は、B型に比べると、きわめて小さく処理されている²⁶(挿図6)。

さて、光背上辺の左右の虚空中には、化生像や雲を伴う天人像が数例鮮やかに表現され



挿図3 古陽洞左(北)壁第三層第一龕「宝珠」



挿図4 古陽洞左(北)壁第三層第一龕
①蓮華 ②化仏帯 ③化仏円圏帯
④火焰帯 ⑤化仏縦帯 ㉓宝珠

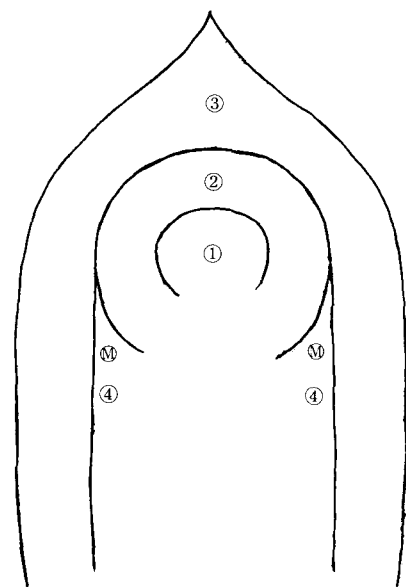
ている(図版7)。一方、楣拱額の各区画中にも、同様の化生像や雲を伴う天人像が認められ、また額中央には、左右から雲を伴う天人に挟まれたパルメット付着の「香爐」が検出される(図版8)。この形態は、一見すると、いわゆる「宝珠」と類似しているが、凝視すると、その中央部に数条(三本)の横線が認められ、明らかに「香爐」であると判断できる²⁸。この額中において、特に注目すべき位置は、楣拱額両端から二区画目の、両脇に茎付着の蓮華を配し、その中央に供養者(天人)を描く図像である。これは、先述の古陽洞銘直下仏龕の楣拱額中に認められた、茎付着の蓮台上的「宝珠」と密接な関連があるものと考えられる。

これを宝珠とすれば、「仏」即「宝珠」の関連から、まさしく、天人の「礼仏供養」の図として解釈することができよう。

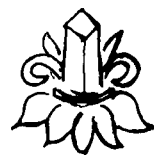
なお、楣拱額上方の中央には、鳥形一基、その両脇に一つずつの化生像と鷗尾、さらにその外側左右に三軀ずつの供養者像と二基ずつの団扇形が認められる。一方、香爐下方には、獣面があり、その両側には垂幕が曲線を描いて配されている。

以上、古陽洞左右壁において確認される非珠の「宝珠」を中心とした仏龕三例について説明をおこなってきたが、すでに、冒頭でもふれたように、諸仏龕を中心とした裝飾浮彫の拓取の実施を完璧に行うならば、今後、この種の宝珠の数は増加するが、しかし、その型は、小論で分類したABCの三類型にとどまるものと推測される。あるいは、仮に増えるとしても、一、二であろう。

ところで、塚本善隆氏によると、古陽洞は、釈迦を本尊とし、千仏、弥勒、多宝・釈迦並坐像を同壁面にもつが、これらは、特に法華経信仰に関係深いものと指摘される²⁹。特に左右壁二・三層の諸仏龕は、きわめて整然と統一構成されており、三層目は主に如来坐像を、二層目は主に交脚菩薩像を配置。これは、釈迦と弥勒の信仰を集中的に示したものとして注目される。龍門北魏窟においては、この二像へ向けての信仰が、他を圧倒して隆盛をみたことは、すでに周知の事実である。



挿図5 古陽洞右(南)壁第二層奥龕
①蓮華 ②化仏円圈帯
③火焰帯 ④拳身光内区 ㊦宝珠

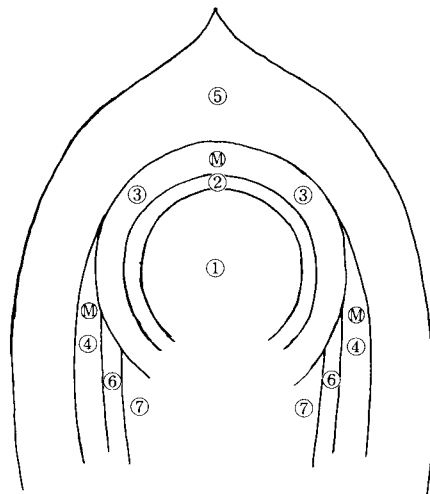


挿図6 古陽洞左(南)壁第二層奥龕
「宝珠」

左壁・古陽洞銘直下の交脚菩薩(弥勒)主尊の仏龕(小論Ⅲの1)と、すぐその左斜上(三層目)の坐仏主尊の仏龕(小論Ⅲの2)との関係、あるいは、古陽洞銘直下の仏龕と配置上対応する正反対側の右壁二層最奥の「坐仏主尊の仏龕」(小論Ⅲの3)との関係は、先述の釈迦と弥勒の信仰を中心とした龍門北魏窟の仏教思想を端的に示している。

4 寶陽中洞

奥(西)壁に、裳懸座上の坐仏(与願・施無畏・通肩、現存)を中尊とし、その両脇に羅漢形(現存)と菩薩の立像(現存)をそれぞれ、二軀ずつ配置(以上の諸像はすべて高肉彫)。中尊には、大きな拳身光がつき、その中には、後述のような珠状の「宝珠」が三例認められる。また、中尊台座前方の両脇には、一对の獅子(右脇は前の左脚を欠失、他は二像とも少々傷があるが現存)を配す。



挿図7 寶陽中洞拳身光
①蓮華 ②条線円圈帯 ③パルメット文様円圈帯 ④供養天縦帯(奥壁)またはパルメット文様縦帯(左右壁) ⑤火焰帯 ⑥縦線帯 ⑦拳身光内区火焰帯 M宝珠

一方、左右(北・南)壁には、酷似する三尊仏立像(中尊如来、両脇菩薩)が配置され、その背後に大きな拳身光をつける。その拳身光(挿図7)中の象徴的空間(挿図7④)には、非珠の「宝珠」が検出され、一方、円圈内唐草文帯の最頂部(挿図7M)には、均整形の焰に包蔵された珠状の「宝珠」が認められる。さらに、両脇菩薩の宝冠装飾中には、非珠の「宝珠」が検出される(後述)。

珠状の「宝珠」のうち、唐草文帯最頂部に検出されたものは、奥(西)、左(北)、右(南)の三壁本尊の拳身光中において共通した表現で示されている(三例ともB型)。しかし、特に、奥壁本尊光背の象徴的空間に配された例は、均整形の焰の先端が、さらに上方に延びるパルメット文(左右対称形)によって表現されている。この宝珠の下方には、忽然と地中から涌出化現したかのごとく、恭敬供養する跪坐天人数体が、宝珠と同様の蓮茎付着の蓮台に乗り、縦列に表現されている(図版9)。先述の古陽洞左壁第三層第一龕の虚空中に認められた「宝珠」は、天人群と共に、まさに飛翔するかのごとく表現されていたが、やはり、ここでも、天人と宝珠とが、密接な関係を保っていると考えられる。

さて、先述のように、左右壁の三尊立像は、酷似した姿で表現され、しかも、それぞれの両脇菩薩同士が、対応する関係で配置されている。したがって、ここでは、右壁三尊像を例に説明していくことにする。すなわち、中尊は、与願・施無畏で通肩(現存)、右脇菩薩

(顔をすべて欠失)は、屈臂、垂下した右手に水瓶(現存)を持ち、左手(欠失)を胸前に挙げ、その掌中には蓮蕾を握る。宝冠中央に非珠の「宝珠」を配し、その上方に坐仏の化仏を置く。なお、宝冠の両脇の帯状空間には、パルメット文を表現する(図版10)。一方、左脇菩薩(顔をすべて欠失)は、右手を右脇菩薩同様胸前に挙げ、その掌中に蓮蕾を握る(欠失)が、屈臂、垂下した左手に環状の持物を持つ^⑩(現存)。なお、宝冠中央には、右脇菩薩同様、非珠の「宝珠」を配しているが、その上方には、坐仏の化仏はみられず、代わりに、開敷蓮華を置く(図版10)。この蓮華の位置は、右脇菩薩宝冠中の「化仏」のそれに対応しており、したがって、「蓮華」は「化仏」と同一の意義を認めてもよいといえよう。なお、宝冠の両脇の帯状空間には、パルメット文を表現している。

右壁三尊拳身光が、奥壁本尊光背と一部異なるのは、象徴的空間(挿図7④)に天人群と珠状の「宝珠」がみられない点だけであり、他はすべて酷似する。右壁拳身光の象徴的空間には、珠状に代り非珠の「宝珠」のみが厳存する。その宝珠は、パルメット付着の蓮台に乗り、本体は均整形の焰に包蔵され、しかもその先端は、奥壁同様、パルメット文が細長く延びる。一方、蓮台は下方からくねって延びるパルメット付着の茎によって支えられている。以上のことは、左壁三尊および光背にも同様に言及することができる。先述のように、両壁三尊および光背とも、対応関係や類似性が強いので、ここでは、以下に相違点だけを指摘しておく。つまり、左壁三尊中の右脇菩薩は左手を胸前に挙げ、掌中に蓮蕾を持つが、屈臂、垂下した右手には、持物は何も認められない。この点だけが、両壁の残る三菩薩と異なるわけである。換言すると、両壁四菩薩の胸前に挙げたそれぞれの掌中には、一様に蓮蕾が握られ、先述の左壁右脇菩薩の右手だけに、持物が全く認められないということである。この環状の持物を握り、宝冠中に非珠の「宝珠」を配する菩薩像は、他の北魏諸洞においては、普泰(第14)洞奥壁両脇に確認される^⑪(図版11)。

ところで、摩尼宝冠と呼ぶべき装飾を頭部に配する例は、先述の菩薩像のみならず、例えば、俗世の貴頭の人間においても若干確認される。すなわち、賓陽中洞前壁入口の左右壁^⑫の右壁にみられる「皇后礼仏進香図」がその一例である(図版12)。特に、この華麗な群像図中の三人の主要人物の頭部装飾として認められる。これは、先述の南北壁三尊中の両脇菩薩頭部にみられたものと同種で、一方は、俗世貴頭の供養者に、かつ一方は、聖なる菩薩に、何れも宝冠装飾として配置されている^⑬。前壁入口左壁には、「皇后礼仏進香図」に対応する「皇帝礼仏進香図」がみられるが、「摩尼宝冠」が皇帝ではなく、皇后供養図中の皇后を含む三女性に限定されている点は、きわめて興味深い。このような例は、鞏県石窟の第一窟前壁入口右壁の「皇后礼仏進香図」においても確認される。これらの供養者群像は、北魏帝室に深く関る貴婦人たちであろう。また、当時の帝室および貴族上層階級の女性たちの中には、尼僧となり寺々に住する者の多かつたことなどからして、豪奢でありな

がらも、格別崇仏心の篤い者とも考えられる。このような点から、皇后供養図は、当時の貴顕の女性たちの信仰態度の一面を暗示しているものと解釈できよう。^④

IV

以上、龍門北魏窟における仏龕および光背面の装飾浮彫と、菩薩・供養者頭部の宝冠装飾として配置された「宝珠」の表現と展開を概観してきたが、次に、これらの「宝珠」の特徴を若干まとめておこう。

すでに、冒頭でもふれたように、龍門北魏窟においては、「宝珠」の表現方法は、次の二種に大別された。

すなわち、

1) 「宝珠」の本体が珠状の形態。

これは、我々がよくみられた形であり、北魏以降にも頻繁に確認される。一般的には、この形態を包蔵する均整形の焰などによって形成される輪郭が、いわゆる「宝珠形」と呼ばれる。

2) 「宝珠」の本体が非珠——圭あるいは長五角形状——

これは、1)とは全く異なるが、龍門においては、北魏窟に集中して確認される。しかし、莫高窟においては、隋窟にも検出されるので、龍門においても、北魏以降の諸洞に存在する可能性は全く否定できない。一般的傾向としては、唐以降は、珠状の「宝珠」が、一世を風靡するかのごとく隆盛をみる。

1)・2)の両者は、宝珠本体を包蔵する焰が、均整形(蓮弁状)の場合に、いわゆる「宝珠形」の輪郭をなす。したがって、「宝珠形」と呼ぶものの中には、宝珠本体をその中を含むものとそうでないものがあることになる。つまり、前者は、珠状であれ非珠であれ、「宝珠」を包蔵する蓮弁状の輪郭を指し、一方後者は、例えば、宝珠形光背と呼ぶ場合などの、単なる外形・輪郭だけを指す。この場合、宝珠そのものは認められなくとも、ただ輪郭の形状だけで、そう呼ぶものと考えられる。

さて、龍門北魏窟の場合、宝珠本体(珠状・非珠)と、その台座としての「蓮台」および宝珠の曜威を示す焰の有無などによって、「宝珠」の本体が構成され形成されていた。そして、焰の表現方法には、不均整形(めらめら燃え上がる)焰と、均整形(蓮弁状)の焰がみられ、しかも、その焰の形状によって、さらに二種(A型、B型)に分類できたが、この焰の全く認められない例をC型とした(挿図6)。

ここでは、龍門の宝珠とでもいうべき特徴をさらに明瞭にするため、再度雲崗の宝珠と比較して、管見の及ぶ限りその差異について触れよう。

まず、

1) 龍門では、蓮台に乗る宝珠が認められるが、雲崗においては、蓮台に代り、主に承盤、あるいは基台状に宝珠が乗る。この台座には、龍門の場合、パルメットが付着するが、雲崗では未着。

2) 宝珠本体が、単独で光背および仏龕面に表現されていた雲崗のような例は、龍門には一例も確認されない。

3) 雲崗の宝珠本体は、その輪郭が長六角形状で表現されているが、龍門では、そのほとんどが長五角形状で示されている³⁶。しかも、龍門の場合、この宝珠が、縦位置にだけ限って配置される。なお、雲崗の台座に乗る宝珠の場合に限って、同様の縦位置の配置がみられた。

4) 摩尼宝冠と呼ぶべき装飾法は、雲崗においては、一例も認められない。しかし、龍門においては、先述のとおり数例検出され、雲崗とは全く異なる系統の様式を形成、成立させている。しかも、龍門賓陽中洞をはじめとする北魏諸洞において検出されるだけではなく、鞏県石窟、莫高窟³⁷などの菩薩供養者頭部にも蔵存する。ちなみに、このような摩尼宝冠の起源は、キジル壁画中に求めることができる。ただし、キジル壁画においては、宝珠本体を縦・横位置の二種の配置が行われている³⁸(挿図8)。したがって、龍門の縦位置一種の配置法は、キジル壁画から一部影響を受けているといえる。しかし、雲崗において、この配置法が認められないことや、パルメット付着の蓮台に乗る非珠の「宝珠」も検出されないことなどから、雲崗と龍門の間には、完全な連続性は、きわめて見出し難い。しかし、不均整形(ゆらゆらうごめく細長い)焰の付着する非珠の「宝珠」だけに関しては、特に焰の表現が酷似することが認められた。このような部分的なつながりは認められるものの、宝珠の構成要素を含めた全体から再見すると、本質的には全く異なる系統であるといえることができる。

それでは、龍門において検出される蓮台に乗る非珠の「宝珠」の直接的起源は、はたしてどこに求めるべきであろうか。当時の洛陽仏教界の一側面を反映していると考えられる龍門石窟に、大きな影響を与えるような仏教文化の中心地で、しかも、龍門石窟に先行する場所は、どこに存在するのであるだろうか。



挿図8 キジル財宝洞供養者頭部
〈摩尼宝冠〉の例
(Alt-Kutschaより)

龍門石窟への南朝文化の浸透度が、きわめて濃厚であることは、すでに吉村伶氏によって指摘されている^③。特に、龍門における雲を伴う天人の誕生過程を示す図像の成立が、直接的に南朝仏教からの影響によるとする吉村氏の卓見をふまえて考えると、小論における「宝珠」と、吉村氏命名の「変化生」・「雲を伴う天人」などの図像との共存関係、また、「天蓮華」の形状ときわめて酷似する「宝珠」、という観点からも、おそらく、かつて南朝仏教界において受容された非珠の「宝珠」が、南朝的変容を受けてた後、北魏文化の南朝化現象に伴って採用され、洛陽仏教界は無論のこと、龍門石窟へも急速に、しかも深く浸透していったものと推測することは許されよう。そして、この種の宝珠の表現された例は、龍門石窟以外の洛陽における墳墓^④からも出土しており、当時の上層階級の一端に、深く浸透していたことが裏付けられる。このような発見は、今後、洛陽における墳墓や遺蹟などの発掘が進展すれば、ますます増加することであろうと考えられる。事実、北魏洛陽においてではないが、遙か東方の高句麗における一古墳壁画^⑤中に、その作例が検出されることは、この辺の事情を暗示しているものといえよう。このような意味で、筆者は、現代中国における墳墓の発掘に際して、関連の遺品が発見されることに、強く期待を寄せている。

附記

拙稿は、筆者が、1983年8月1日から同18日まで別府大学アジア歴史文化研究所の派遣した中国仏教美術学術調査団の一員として、参加した時の調査に基づく成果の一部である。末筆ながら、派遣に際しての大学当局並びに研究所の関係者の皆様の深い御理解と強い御支援に対し、また、洛陽滞在中、あらゆる御便宜を取り計らって頂いた中国国際旅行社洛陽支社の孫玉生氏に対し、心より深く感謝申し上げます。

註

- ① 拙稿(1984)「龍門石窟の復元——パリ・ギメ博物館所蔵・旧蓮華洞迦葉像頭部を中心として——」『芸術学論叢』第6号 別府大学文学部美学美術史学科。
- ② 于希寧・羅未子(1958)『北魏石窟浮彫拓片選』中国古典芸術出版社。この書物は、大変貴重な資料を収録しているが、残念ながら若干の明らかな誤りをおかしている。註⑥参照。
- ③ 吉村伶(1983)『中国仏教図像の研究』東方書店。
- ④ 拙稿(1980)「中央アジア・トユク遺蹟仏教寺院壁画断片に表現された『宝珠』について」『別府大学紀要』第21号。
- ⑤ 「摩尼宝冠」という表記は、次の仏典中にみられる。
 - (1) 『佛說彌勒菩薩上生兜率天經』(大正蔵・第14冊)
 - (2) 『大方廣佛華嚴經』(大正蔵・第9冊)

その他の諸経典中にも検出されるが、任意に上記二例をあげた。なお、(2)の経典中には、次のような表記もみられる。すなわち、「摩尼寶王冠」、「如意寶冠」、「天冠明珠」、「摩尼寶王爲髻明珠」、

「摩尼寶王以爲天冠」あるいは、「摩尼宝冠」に類する表記としては、次の例があげられる。

- (3) 『過去現在因果經』(大正蔵・第3冊)

「寶冠髻中明珠」

- (4) 『佛所行讚』(大正蔵・第4冊)

「寶冠頂摩尼」

以上、同意異字の表記が若干みられるが、小論においては、「摩尼宝冠」の名称を採用した。

- ⑥ 前掲書『北魏石窟浮雕拓片選』所収の図版31は、その説明に「龍門蓮華洞背光」と記しているが、1983年8月に実施した筆者の現地調査の結果に基づくと、これは、古陽洞南壁第二層奥龕の拓片であることが判明した。したがって、この拓片図の出所は、古陽洞と改められるべきである。このように、この書物においては、これ以外にも明らかな誤まりが若干認められるので注意を要す。

- ⑦ 維摩・文殊の詰問図や、天人群・天蓮華などの諸図像と共に、非珠の「宝珠」が検出される。宝珠の長五角形状の本体は、蓮弁状の焰に包蔵されているが、さらにその先には、細長い焰がくねって延びている。蓮台に乗るこの宝珠の下部には、地中より延びる細長い茎が附着し、さらにその左右にはパルメット文が表現されている。なお、時期は、北魏末～東西魏頃と推測される。

- ⑧ 常盤大定・関野貞(1975)『中国文化史蹟』2 法蔵館、所収図版16, 17参照。

山本明(1919～1921)『龍門石窟』太和園、所収図版13, 14, 16, 17参照。

なお、左右壁の各両脇菩薩像頭部は、東京国立博物館と、大阪市立美術館にそれぞれ一例ずつ所蔵されていることが確認される。

- ⑨ 長廣敏雄他(1972)『中国美術 第三巻 彫塑』講談社、所収図版15, 16参照。

なお、皇帝供養図は、アメリカ・ニューヨークのメトロポリタン美術館の所蔵となる一方、皇后供養図は、同じくアメリカ・カンサスシティのネルソン美術館の所蔵となっている。

- ⑩ 水野清一(1960)『中国の彫刻』日本経済新聞社、所収図版2参照。

- ⑪ 山本明、前掲書所収図版32参照。

常盤大定・関野貞、前掲書所収図版34参照。

- ⑫ 常盤大定・関野貞、前掲書所収図版36(2)参照。

塚本善隆氏によると、魏字洞南壁大仏龕の中尊(宝冠菩薩坐像)は、弥勒菩薩と推定して誤まりないものとしている。とすれば、弥勒菩薩と「摩尼宝冠」とは、きわめて緊密な関係を有していると考えられる。

なお、この頭部断片は、現在大原美術館に所蔵されているそれと酷似している。

塚本善隆(1974)『塚本善隆著作集 第二巻 北朝仏教史研究』大東出版社、403頁参照。

- ⑬ 拙稿(1980)「雲岡石窟に於ける『宝珠』をめぐる諸問題」『芸術学論叢』第3号 別府大学文学部美学美術史学科参照。

- ⑭ 珠状の「宝珠」を掌中に奉持する例は、蓮華洞左脇菩薩に認められる。なお、もう一方の別の手には、環状の持物を握る。

- ⑮ 開敷蓮華は、雲崗第19B洞後壁光背中の象徴的空間に、跪坐合掌供養の天人群と共存して検出される。なお、雲崗諸洞の光背における象徴的空間には、以下の例のように、めらめらと燃え上がる焰に包蔵された非珠の宝珠が、跪坐合掌供養の天人群や化仏群と共存している。

(1)第17洞東壁左脇大龕光背(台は、蓮華かどうかは不明だが、基台状ではない)、第17洞南壁西大龕光背(台はなく単独)。

(2)第20洞本尊光背(台はなく、単独)。

(3)第13洞南壁中層七仏光背(宝珠は、基台状に乗る)。

- ⑩ 四軀の羅漢形は、少年あるいは、青年の相貌で表現されており、後の五尊形式中の、二菩薩、二羅漢像においてみられる阿難・迦葉という意識は、まだあらわれていないものと考えられる。
- ⑪ 鞏県第1窟東壁入口寄二龕においても、両脇菩薩内側に二例検出される。この形状について、吉村怜氏は、不可思議な天の蓮華と呼び、浄土における〈生命の華〉であると同時に、〈光明の華〉であると指摘している。仏典にいう〈摩尼宝樹〉とは、このようなものを指すのであろうか。吉村怜前掲書99頁参照。
- ⑫ 四軀の立像は、体軀前方にて交叉する天衣、頭部の形状などから、菩薩形とみることができる。これは、『妙法蓮華經』巻第五、從地涌出品第十五(大正蔵第9冊)にみられる菩薩衆中の四導師に相応するものと解釈することができよう。
- ⑬ 『放光般若經』(大正蔵第8冊)、『摩訶般若波羅蜜經』(大正蔵第8冊)、『大智度論』(大正蔵第25冊)などの般若經典によると、以下のような一連の緊密な関係がたどれる。
 「般若波羅蜜即是佛。般若波羅蜜不異佛。佛不異般若波羅蜜」
 「世尊即是般若波羅蜜。般若波羅蜜即是世尊。是般若波羅蜜中。出生諸佛菩薩。辟支佛。阿羅漢……」
 「般若波羅蜜如摩尼珠」般若如如意寶珠「舍利者是般若波羅蜜之寶器」法既滅盡舍利變成此珠。以益衆生」
 以上のことから、つまり、「仏」即「宝珠」、あるいは「舍利」即「宝珠」という意味が読みとれる。
- ⑭ 水野清一・長廣敏雄(1978)『龍門石窟の研究』同朋舎、99頁参照。
 上掲書によると、この像の形式比例が、もっともよく後壁本尊(古陽洞本尊)に似ていることを指摘している。したがって、この像を主尊とする仏龕における諸要素については、古陽洞草創期の造像理念を考える際に、十分注意を払わなければならない。
- ⑮ 水野清一・長廣敏雄前掲書(98頁参照)によると、この両羅漢像は、いわゆる迦葉、阿難という意図はなく、しかも形からは五尊形式ではあるが、明確な五尊像の意識もないであろうと指摘している。左右に二軀ずつの羅漢の並ぶ仏龕(小論Ⅲ、1)の例の簡略形式とも考えられる。註⑩参照。
- ⑯ Y字形の線状は、下記のように、雲崗においては、長六角形状の宝珠本体に認められたY状の線の上半分のY状であり、本来キジルにおいては、宝珠本体(四角柱状)のそれぞれの面の接する稜線を示すものとして採用されていたものである。
- ⑰ 水野・長廣前掲書(98頁)によると、右脇羅漢形の掌中にも宝珠が奉持されていると指摘しているが、これは、右脇菩薩頭光下方にみられる珠状を包蔵する蓮弁状の焰の形状を指すものと考えられる。
- ⑱ すぐ左側の仏龕中には、釈迦・多宝の二仏並坐像が認められる。
- ⑲ 水野・長廣前掲書(98頁)によると、維摩・文殊を拱額のそとに彫ることは多いが、拱額のうちに彫ることはほかに例がなく、これは、拱額外に彫るという定式のできる以前の早い一例としている。なお、このような例は、古陽洞左壁第三層第三龕拱額にもあることを指摘している。
 また、塚本・前掲書(275頁、388頁)によると、龍門においては、最も盛んに仏龕の入口上部の意匠として刻まれ、かつ、この出典である「維摩經」は、特に宣武帝が最も好んで講じた仏典であったことを指摘している。
- ⑳ このような例は、鞏県石窟に数例確認され、その関連性が注目される。
- ㉑ 雲崗においては、このような雲を伴う天人像は確認されない。吉村氏によると、このような天人像の発生は南朝に由来するとされる。吉村前掲書参照。
- ㉒ 註⑩参照。

②⑨ 塚本前掲書、387頁参照。

③⑩ 奥壁両脇菩薩は、それぞれ右手に蓮蕾を持ち、左手に環状の持物を握る。なお、宝冠前面中央部には、蓮華を配置してあり、南北両壁三尊仏中の両脇菩薩の摩尼宝冠と意味上の関連性が強い。

③⑪ 第14(普泰)洞奥壁両脇菩薩立像頭部には、同種の摩尼宝冠が確認される。残念ながら、今日両脇菩薩のうち右脇像の頭部を欠失するが、幸いにも現存する左脇像によってその欠を補い、当初の様子を彷彿させることができる。このような摩尼宝冠を戴く菩薩像は、龍門においては、魏字洞右壁本尊(弥勒菩薩)頭部にも認められる。なお、鞏県石窟においても数例確認され、両者の関連性が注目される。

③⑫ 北野正男氏は、下記の著作の中で、入口両壁の浮彫図について、南朝、特に齊文化からの影響を指摘されている。すなわち、「賓陽洞の品格を高めているものに、天井のほか前壁の夢幻的な彩色の浮彫像があった。現在、メトロポリタン美術館とネルソン美術館に分蔵されているが、この浮彫像は漢代画像石の系統をひくものである。前壁入口の左右壁は、上下四層に区切られ、最上層は維摩經義による維摩居士と文殊菩薩の対問浮彫像で、雲岡のものより絵画的に表現されている。第三層は右方が須大拏本生図であり、左方は薩多太子本生図で、ともに背景に山と樹木で山水をあらわしているのは、雲岡ではみられなかった絵画的表現法で、南朝絵画の影響であろう。この山水画的表現方法は、麦積山石窟の塑像レリーフにもみとめられるし、敦煌石窟の壁画にもみとめられる。第二層は左方は皇帝の、右方は皇后の礼仏供養行列の浮彫像で、後述の鞏県石窟の第二、三、五窟にもみられるが、これも絵巻的表現で南朝齊文化の影響と考えてよいであろう。」と。筆者も全く同感であり、この他にも南朝的要素は、龍門石窟において若干指摘することができる。

北野正男(1976)「石窟寺院とその造像」『六朝の美術』大阪市立美術館編、平凡社、214頁。

③⑬ 宝珠は、本来〈Cintā-maṇi〉(梵語)を漢訳した「如意宝珠」、「摩尼宝珠」という表記の後半部を示すもので、同意異字の漢訳表記(意識)には、「明珠」「垢離」「宝光淨」などがある。これらの訳は、宝珠の清浄なる側面を端的に示したものと考えられる。この清浄な点に関連して、次の仏典は、きわめて示唆にとむ問題を含んでいると考えられる。すなわち、

『大般涅槃經』卷五 如來性品第四之二(大正藏第12冊、392頁)に、「如來清淨無有垢穢。如來之身非胎所汚。如分陀利本性清淨。如來解脫亦復如是。如是解脫即如來。是故如來清淨無垢。」あるいは、『同經』卷五 如來性品第四之二(392頁)に、「眞解脫者即是如來。譬如聖王髻中明珠無有垢穢。夫解脫性亦復如是無有垢穢。無垢穢者喻眞解脫。眞解脫者即是如來。」(傍点筆者)

上記において、明珠(宝珠)は、清淨無垢であるがゆえに如來と同様、眞の解脫に喩えられる。このような神聖かつ威徳に満ちた象徴的存在である「宝珠」を、宝冠中に安置することは、とりもなおさず、これを身に著す菩薩や供養者は、身心が清淨無垢となり、ついには解脫という究極の目標に到達することが可能となる。あるいは、『同經』卷第十七 梵行品第八之三(467頁)に、「善男子。若欲受持者。說大涅槃者。說佛性者。說如來秘藏者。說大乘者。說方等經者。說聲聞乘者。說辟支佛乘者。說解脫者。見佛性者。先當清淨其身。以身淨故則無呵責。無呵責故令無量人於大涅槃生清淨信。信心生故恭敬是經。若聞一偈一句一字及說法者。則得發於阿耨多羅三藐三菩提心。當知是人則是衆生眞善知識非惡知識。是我弟子非魔眷屬。是名菩薩非世間也。善男子。是名世間之所不知不見不覺。而是菩薩所知見覺。」

上記において、受持を欲する者、大涅槃、仏性、大乘、小乗、解脫を説く者、仏性を見る者などは、まずその身を清淨にすべしと説き、さらに、清淨信を生ずることによって、経を恭敬し、一偈一句一字、および説法を聞く者は、すべて菩提心を発すことを得ると説いている。このような意味から考えて、宝冠上に宝珠を安置することは、身を清淨にすることによって、最高の仏の世界へ導かれていく

という意図を含んでいるものと考えることができる。なお、『大方廣佛華嚴經』(卷第四十四 入法界品第三十四之一、679頁)に、「一切衆生向解脱音摩尼寶王冠」と呼ぶ宝冠がみられるが、まさしく、解脱へ向かわしめる崇高な存在として記されている。

- ③④ 例えば、次の經典にみられるような、変成男子の場面と、何らかの関連をもっているものと解釈できる。すなわち、『妙法蓮華經』卷第四 提婆達多品第十二(大正蔵第9冊、35頁)に

「時舍利弗語龍女言。汝謂不_レ久得_レ無上道。是事難_レ信。所以者何。女身垢穢非_レ是法器。云何能得_レ無上菩提。佛道懸曠經_レ無量劫。勤苦積_レ行具修_レ諸度。然後乃成。又女人身猶有_レ五障。一者不_レ得作_レ梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身。云何女身速得_レ成佛。爾時龍女有_レ一寶珠。價直_レ三千大千世界。持以上_レ佛。佛即受_レ之。龍女謂_レ知積菩薩尊者舍利弗言。我獻_レ寶珠_レ世尊納受。是事疾不_レ。答言甚疾。女言。以_レ汝神力_レ觀_レ我成佛。復速_レ於此。當時衆會皆見_レ龍女。忽然之間變成_レ男子。具_レ菩薩行。即往_レ南方無垢世界。坐_レ寶蓮華_レ成_レ等正覺。三十二相八十種好。普爲_レ十方一切衆生_レ演_レ說妙法。爾時娑婆世界菩薩聲聞天龍八部人與_レ非人。皆遙見_レ彼龍女成佛。普爲_レ時會人天_レ說法。心大歡喜悉遙敬禮。無量衆生聞_レ法解悟得_レ不退轉。無量衆生得_レ受_レ道記。無垢世界六反震動。娑婆世界三千衆生住_レ不退地。三千衆生發_レ菩提心_レ而得_レ受記。知積菩薩及舍利弗。一切衆會默然信受。」

上記において、垢穢の身であるとされる龍女が、仏に無価の宝珠を献上するや、忽然として、龍女は男子となり、自ら求法者として、無垢世界において、さとりをひらいて仏になり、説法することが説かれている。ここでも「宝珠」は、「無垢」なるものであり、しかも「さとり」へ導き、「仏」としてあらしめる無上の威徳を有していると考えられる。皇后供養図中の三人の貴顕の女性、おそらく帝室の最高位の女性と考えられるが、摩尼宝冠を大事に頂戴しているのは、その威徳によってその身心を清浄無垢にし、さらに解脱へ達し、成仏せんことを発願しているものと解釈することができよう。つまり、変成男子の場面と、この図中の女性像は、きわめて緊密な関係があるものと考えられるのである。

- ③⑤ 隋305窟、藻井の西側と東側に、天人、神々、化生像と共存して、珠状と非珠の宝珠が検出される。

- ③⑥ 厳密にいうと、雲崗においては、長六角形状以外に楕円状もしくは、紡錘状のものが認められる。一方、龍門においては、すべてが長五角形状と断言することはひかえなければならぬ。なぜなら、鞏県において、長六角形状が厳存するので、その可能性が、龍門に全くないとはいいたいからである。

- ③⑦ 莫高窟西魏285窟供養者頭部に摩尼宝冠として確認される。その形状は、龍門の作例と酷似している。

- ③⑧ A. Grünwedel (1920), Alt-Kutscha, Berlin, Fig. 83, S.183.

この図中には、僧形人物と共に立仏を圍繞する供養者群がみられ、それらの頭部に縦横二種の安置法が確認される。

- ③⑨ 吉村怜前掲書。

- ④⑩ 西川寧(1966)『西安碑林』講談社、図版135-141(北魏・荀景墓および蓋、永安二(529)年銘)参照。

宝珠は、四神、飛廉などの中国的神々や迦陵頻と共存して検出される。

- ④⑪ 金基雄(1980)『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版社、図版51参照。

江西大墓天井壁面に、パルメット文付着の蓮台に乗る非珠の宝珠が検出されるが、その形状は、鞏県石窟の例に酷似する。

別府大学アジア歴史文化研究所報 第3号(1984)

図版出典

図版1. 2. 3. 4. 6. 筆者撮影

図版5. 『龍門石窟の研究』

図版7. 8. 『北魏石窟浮彫拓片選』

図版9. 10. 『中国文化史蹟2』

図版11. 山本明『龍門石窟』

図版12. 長廣敏雄他『中国美術 第三卷 彫塑』(講談社)



図版 1 古陽洞左(北)壁第二層奥龕



図版2 古陽洞左(北)壁第二層奥龕「宝珠」部分



図版 3 ㊦ 古陽洞左(北)壁第二層奧龕楣拱額中央右半分

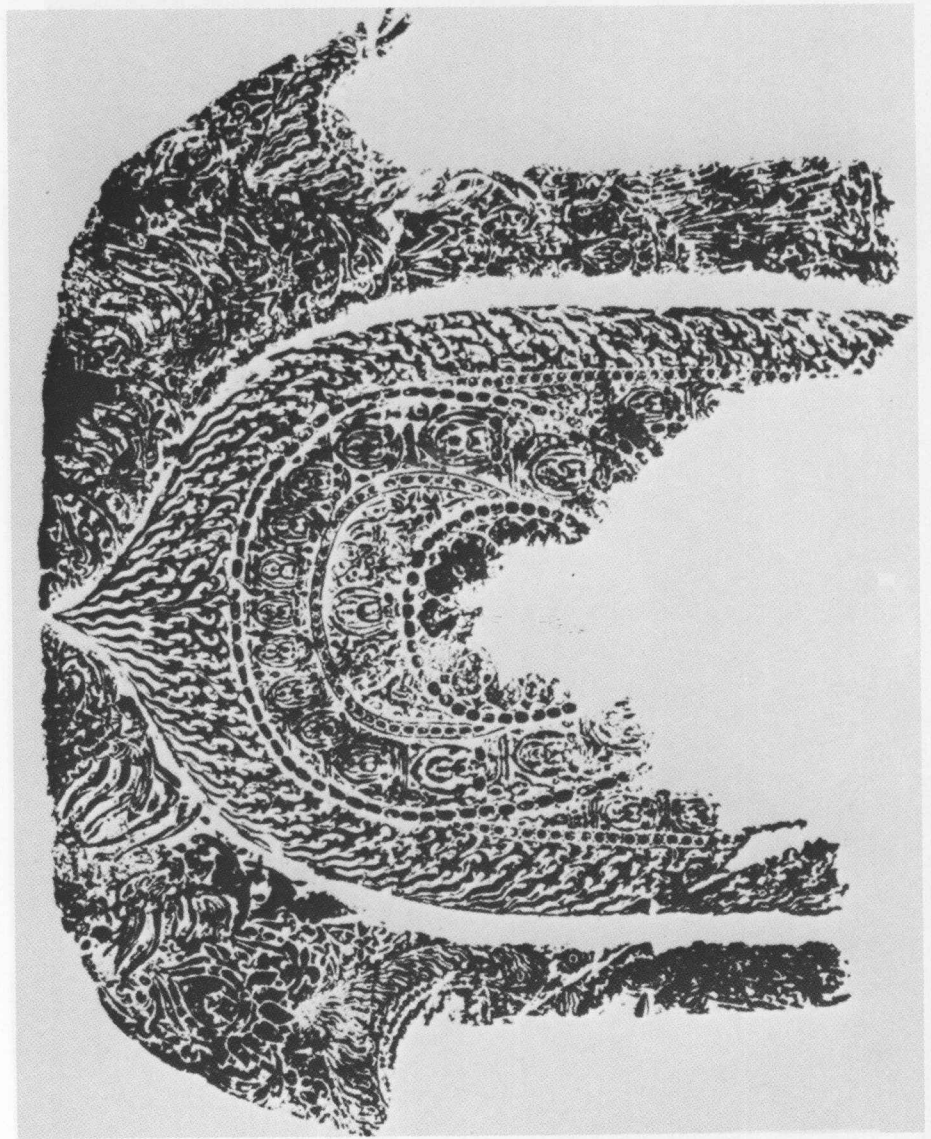
図版 4 古陽洞左(北)壁第二層第一龕



図版3⑥ 古陽洞左(北)壁第二層奥龕楣拱額中央左半分

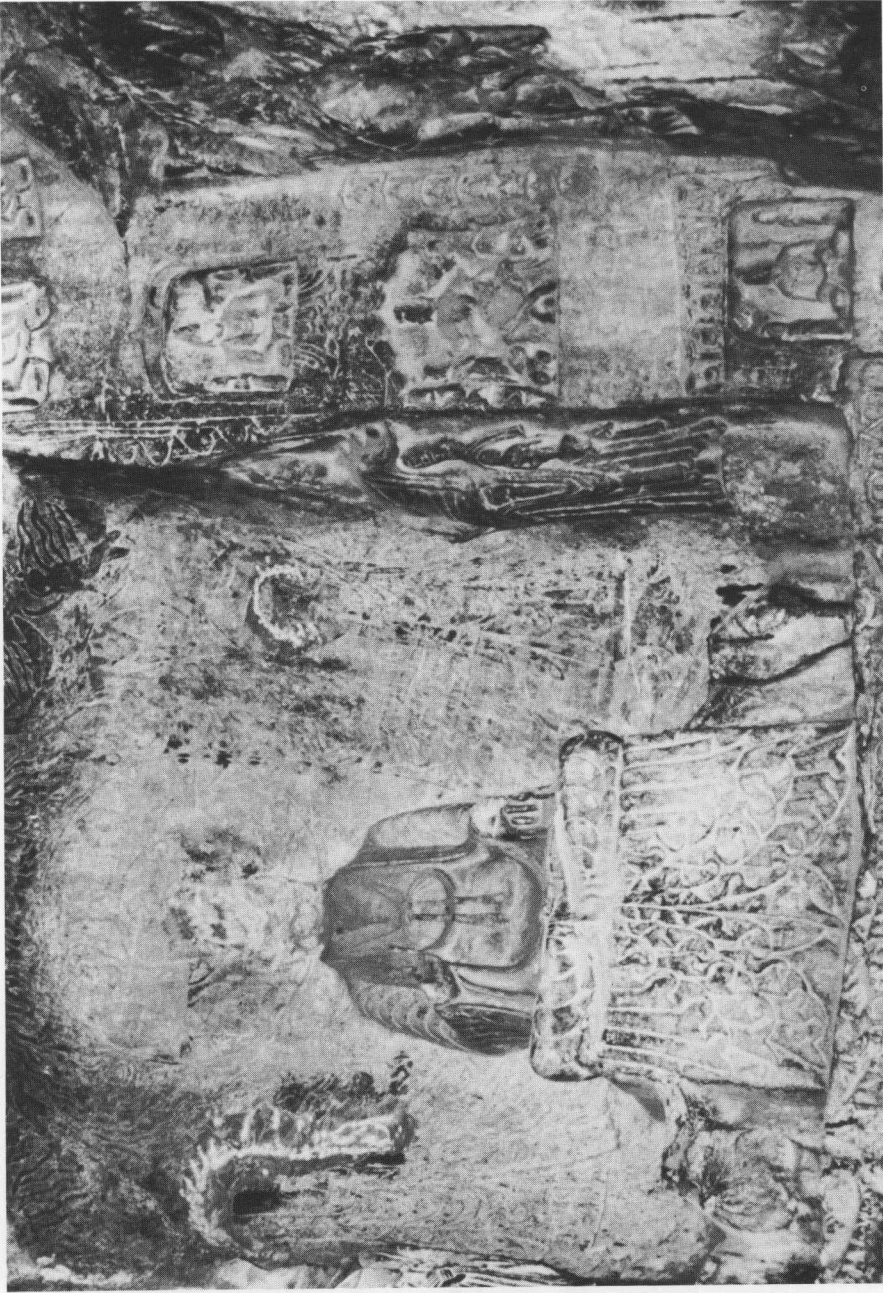


図版 4 古陽洞左(北)壁第三層第一龕

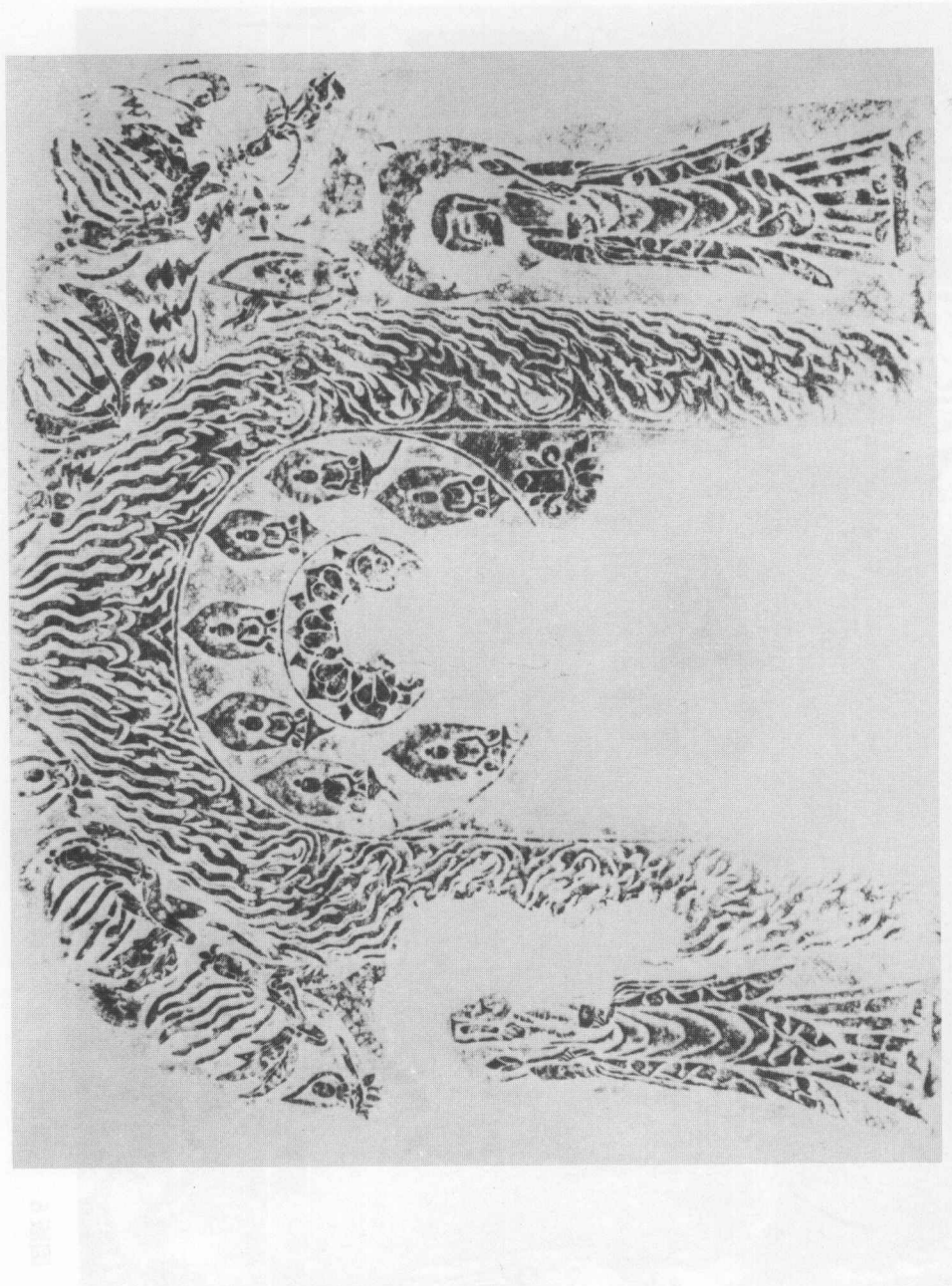


図版5 古陽洞左(北)壁第三層第一龕(拓片図)

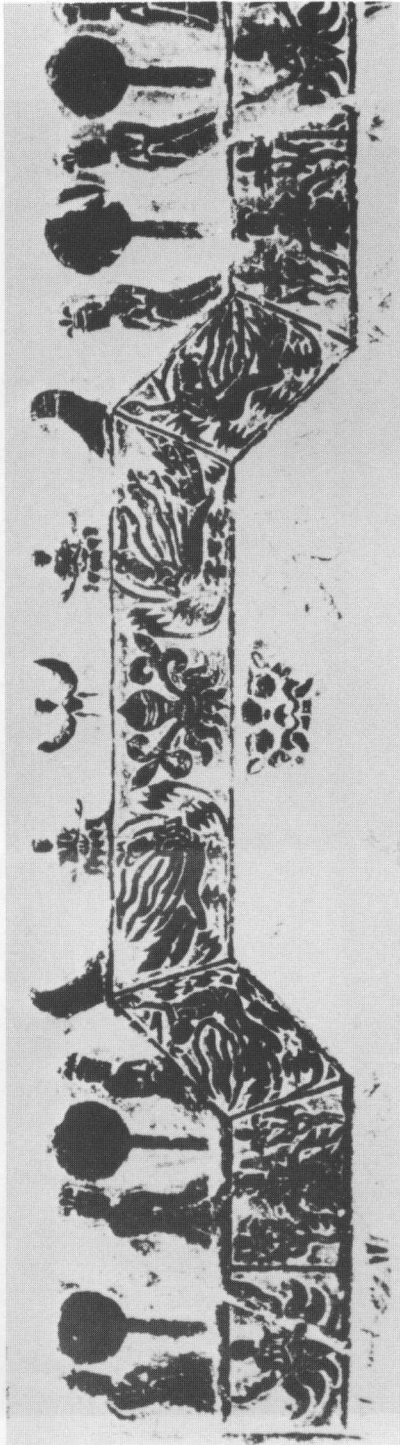
第一層第三層左(北)壁第一龕(拓片圖)



図版 6 古陽洞右(南)壁第二層龕



図版7 古陽洞右(南)壁第二層奥龕(拓片図)



図版 8 古陽洞右(南)壁第二層奥龕楣拱額(拓片図)



図版9 賓陽中洞奥壁



図版10 賓陽中洞右(南)壁



図版11 普泰(第14)洞奥壁右脇菩薩



图版12 賓陽中洞前(東)壁「皇后礼仏進香图」